初期のアイヌのバハイ森竹竹市と(1902～1976)、その長男梅ヶ枝一智(1924～1992)を思い出して

バーバラ・R・シムズ

バハイの守護者ショーギ・エフェンディは、難しい地域への布教をよく勧めました。例えば、膨大なスケールの１０年計画の開始に、守護者は、パイオニア達が世界中にできるだけ広く分散して欲しいと言われました。彼らは、「寒帯地方の恐ろしい寒さや気力を奪う熱帯地方の暑さに立ち向かって、砂漠や、遠方の島と山の危険、寂しさと厳しさを無視すべきだ」と守護者は書かれました。世界中のいわゆる「少数民族」に信教を伝えることに熱心でした。それらの民族の中に、暴政などに「しいたげられている」民族もいると分かっておられたし、信者に「多様性」が喜ばしいことだと思っておられたからでしょう。

従って、１９５０年代の後半に日本のアイヌ民族にバハイが接触を持つようになったと聞いたら、守護者は非常に関心を持って、当時の全国精神行政会宛の手紙にこう書かれました：「日本の先住民であるアイヌ民族にバハイが接触を持つようになったと聞いたら、守護者は大いに喜ばれました。数人がバハイとして活発になり、他のアイヌ達に神様の大業を教えられることを望んでおられます。それができたら、すばらしい結果が生じるに違いないからです。」

様々な時に様々なパイオニアが、たいてい日本人のバハイとともに、アイヌの村から村へと布教に行きました。その村の名前は記録されていますが、村そのものは、町や都市に吸収され、名前は残っていません。

こうした活動の結果、１９６１年１２月に、森竹氏（１９０２～１９７６）と梅ヶ枝氏（１９２４～１９９２）を含んで、６人のアイヌがバハイになりました。この６人はほとんどアイヌ共同体の指導者と見られるような人々でした。森竹氏は、村の長老の一人で、アイヌ民間伝承を重んじた詩人で文化人でありました。アイヌの工芸品を保管した店も持っていました。

また、森竹氏は、純粋なアイヌの血をひく少数の一人でした。奥さんは日本人なので、息子の梅ヶ枝氏は混血でしたが、本人はアイヌだと考えていました。最近の統計によりますと、アイヌは２万人もいるといっていますが、１９７０年代でも、純粋なアイヌ人は数百人しかいなかったと概算されていますので、今は純粋のアイヌの血をひいている人はいないと言ってもいいでしょう。

なぜアイヌがこれだけ消えたかといいますと、明治時代の政府がアイヌ民族を国家体制に組み込むための同化政策を定めたからです。アイヌは、戸籍法の施行に基づき、日本式姓名をもって戸籍簿に登載され、子供が日本式教育を受け、みんなが天皇に忠実になるように法令ができ、徐々に実施されました。森竹氏は、こうした法令は不当だと思わなかったようです。現代の社会において、アイヌの伝統的な生活は続かないと言っていました。アイヌ語は書き言葉がないし、アイヌの文化には、学校がなかったが、森竹氏は、教育が大事だと考えました。

森竹氏がバハイ教に関心を抱いたひとつの理由は、バハオラが教えられたように、「すべての人間は兄弟である」と固く信じていたからでしょう。又、他のアイヌと同じように、自然に親しみを感じていました。森竹氏著作の『風のように』という詩集の中に、この考え方がよく反映されていますので、ここで、ふたつの詩を紹介します。

原始生活

火も水も草木鳥獣
凡てを神として
生活(たつき)した往昔(むかし)の
ウタリ（同族）等
感謝の祈り！
信仰の生活！！
私は凡てをおそれ
凡てを敬ひし祖先(みおや)の
原始生活が懐かしい。

ヱカシの死

雪の様な髪と
まぶたを蔽う睫毛
弓のような腰した
ヱカシ（老爺）は
ぽっくり死んだ

ヱカシ（自分等の）
ヱカシ（老爺）
ピリカ（よい）
オンネ（往生）
したとウタリ（同族）等は
悲しそうな顔もしてない

メノコ（女）は
シト（餅）をつき
ヱカシ等は
酒を手向けつ往昔(むかし)を語る
逝きしヱカシの事ども

横たはるヱカシの枕辺には
大きなツキ（木盃）に
酒ついであり
頻に立てかけてある

煙管(きせる)よりは
タンバク（煙草）の煙が
静かにゆらぐ

背後(うしろ)には
白木のク（弓）と
イカヨプ（矢筒）を吊した
槍型のクワ（墓標）が
立ててある
来世に続く
アイヌとヱキムネ（猟）

ヱカシのタンバクは消えた
人混みの中へ聞ゆる
メノコのすすり泣き
アイヌは亦一人減った
明日生れる
ヱカシの孫は
ヱカシの血こそ混れど
もうシサム（和人）になるんだ
シサムに＿＿＿。

私は、１９６０年代の前半に北海道へ旅行して、梅ヶ枝氏とその家族に出会いました。その時は、日本は経済的にまだまだ成長していなくて、どこも貧しかったのです。梅ヶ枝氏の家も小さく、食事にはじゃがいもしかありませんでしたが、同じバハイとして暖かく迎えてくれましたので、私は感動しました。いくつかのアイヌの村に一緒に布教しに行きましたが、その時から梅ヶ枝氏がなくなられるまで、長い年月を通じて、しっかりした友情を感じました。

梅ヶ枝氏は、お父さん森竹氏から、統率力を継承しました。子供の時、差別や偏見を味わいましたが、暖かい、陽気な性格には、影響を及ぼさなかったのです。アイヌ民族の代弁者になり、アイヌ工芸の販売店を経営していました。梅ヶ枝氏自身は、かなりの腕のある木彫り師でした。

１９６０年代の後半から１９７０年代にかけて、アイヌに対する偏見はほとんど消え去り、アイヌ民族とその生活ぶりに興味が高まりました。梅ヶ枝氏は、アイヌ文化を紹介するために、テレビや雑誌に取材されるようになりました。

１９６５年に、梅ヶ枝氏は、大業の翼成者アレキザンダー女史とモハジャ博士に顧問補佐に任命され、二十年間以上その役を果たしました。